

# 東京市立日比谷図書館建設の経過—設立建議から開館にいたるまで—

吉 田 昭 子 (慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻)

a-yosida@comp.metro-u.ac.jp

## I はじめに

明治 41 年 11 月に開館した、東京市立日比谷図書館は、東京の百建築の一つに数えられる美しい建物だった。建設構想は明治 30 年代の初めから論議されていたが、明治 37 年 3 月坪谷善四郎等による「通俗図書館設立建議」が議決され、明治 39 年 7 月の予算の決議により、具体化の段階に入った。

東京市立図書館に関する研究としては、日本近代図書館史の研究者として知られる、竹林熊彦 (1888-1960) の金光図書館報『土』の論文「東京市立図書館の史的研究 (1)~(4)」があげられる。昭和 29 年度の文部省科学研究助成金による「近代日本図書館の研究」の一部として公表され、明治 35 年頃以降の東京市立図書館計画、日比谷から牛込、日本橋図書館までの東京市立図書館の史的変遷を辿った研究論文である。

その後、東京の公立図書館事業史に関する研究は意外に少なく、佐藤政孝著『東京の図書館百年の歩み』(泰流社 昭和 54) 等が見られる。しかし、これまで大正 10 年創刊の東京市立日比谷図書館報『東京市立図書館と其事業』、『五十年紀要』(昭和 34) などが繰り返し引用され、東京市立日比谷図書館の一次資料に基づく具体的な研究は、十分には行なわれてこなかった。

そこで、本発表では、設立建議から明治 41 年の図書館開館までを対象に、その具体的な建設経過を、経費、所蔵コレクション、建築図面の変遷等の視点から、明治期の新聞雑誌や公文書類を元にたどってみたい。

## II 市立図書館設立経費

明治 37 年 3 月の「通俗図書館設立建議」決議にもかかわらず、東京市立図書館の設立は財政面では、日露戦争や天候等の影響を受け、大幅に遅れた。しかし、明治 38 年には、日露戦争勝利や 7 月の戸野周二郎 (1866-1955) の教育課長就任を契機に実務面で急速な進展をみせる。戸野は日比谷図書館設立経験を元に『学校及教師と図書館』(宝文館 明治 42) を発行しており、緒言によると、図書館設立にあたり、帝国図書館、大学図書館、大橋図書館等で内外図書館文献の調査研究を行っていた。

明治 39 年に入り、2 月 16 日の都新聞は、東京市学務委員会で調査中であるが、当初予算の 15 万円を 10 万円に切り詰め、新たに土地を買収、閲覧室を煉瓦造とする予定を変更し木造とし、小規模通俗図書館を少なくとも 5 箇所以上市内に建設すると伝えている。4 月 10 日には東京市会で、市立図書館建設調査予算が提案され、ボーリング、樹木植替、杭打試験、設備調査等 370 円の調査経費がつく。7 月 11 日の市会に予算案が提出され、具体的段階に入った。予算は、建設費が 134,100 円から 133,180 円 (建設設備費 117,780 円、開設準備費 5,400 円等) に修正して議決された。同年 7 月の東京市立図書館設立趣旨によると、各閲覧室の広さと閲覧収容人員計画は表 1 のとおりであった。当初の総収容人員は 462 人、書庫は煉瓦造 4 階建 27 坪余で、約 8 万冊の収容能力を想定していた。

室名	広さ	収容人員
普通閲覧室	95 坪余	280 人
特別閲覧室	16 坪 5	50 人
婦人閲覧室	12 坪	35 人
新聞雑誌閲覧室	26 坪	70 人
児童室	9 坪	27 人

表 1 東京市立図書館設立趣旨

明治 39 年 9 月には、外国語学校教授伊東平蔵を図書館建設準備のための主事として任用、諸準備が一任される。伊東平蔵（1856-1929）は、大橋図書館主事等を経て日比谷図書館主事に就任し、図書館設立実務の促進の役割を果たした。

伊東はこれ以前から、東京市教育会調査部委員として、明治 33 年には東京市立図書館設立原案を作成している。この原案では煉瓦造建坪 20 坪、建設費 3,000 円、創業費 1,000 円、学校等への架設を可とする小規模な図書館を提案していた。

東京市立図書館構想の代表的なものには、伊東の小規模図書館案の他、建設費 15 万円を想定した坪谷善四郎案とそれよりやや中規模の建設費 9 万円の寺田勇吉構想がある。予算及び収容人数等からみると、明治 39、40 年度継続予算案は、創設費 15 万円、閲覧者 1 日 500 人を想定した、坪谷善四郎の構想に近いものということになる。

### III 所蔵コレクション

日比谷図書館の開館式は、明治 41 年 11 月 16 日午後 2 時から、出席者 300 名で開催された。戸野教育課長事務報告によると、開館時のコレクションは、購入図書 9,458 冊（和漢書 8,972 冊、洋書 486 冊）、寄贈

図書 10,386 冊（和漢書 9,540 冊、洋書 846 冊）、保管洋書 99,962 冊の総計 119,806 冊で構成されていた。

予算上は、明治 39、40 年度継続予算の図書購入費は 20,000 冊、10,000 円となっている。約 10,000 冊の寄贈図書は、内閣文庫及諸官署、福羽逸人、坪谷善四郎等 58 名から寄贈された資料であった。

保管洋書とあるのは、「日英文庫」や「温情図書館」と呼ばれた寄託図書である。英国留学中の宗教学者高楠順次郎（1866-1945）から日本における英書の必要性を聞いた親日家エリザベス・ゴルドン夫人（1851-1925）が呼びかけて収集した書籍、図画、楽譜等である。森睦彦著「ゴルドン夫人と日英文庫」（東海大学紀要 1991 年第 1 号）はその収集経過を詳しく説明している。

明治 39 年 12 月 6 日の毎日新聞によると、日比谷図書館と同規模の日英図書館を神田一ツ橋通に建設する予定であった。しかし、高楠が構想した独立図書館は実現せず、日比谷図書館に寄託を請願することになる。東京都公文書館の明治 40 年 9 月 12 日尾崎東京市長宛ての請願によると、ゴルドン夫人から東京外国語学校へ運送された書籍は、総数 156 函 62,000 冊に達しており、日比谷図書館開館時には約 38,000 冊増加していたことになる。寄託条件は、受贈資料を日比谷図書館で整理保管し公衆の利用に供すること、近い将来独立図書館を計画し、実現時には本名の他に別名として Dulce Cor Library をつけることなどであった。

東京市は同年 10 月には請願を容れ、12 月に早稲田大学英文科卒業の肥塚麒一を給与 25 円で任用する。任用理由に、寄贈英

書の多くが小説、文学であったため、内容を訳読できる吏員が必要になった為とある。開館式列席のためのゴールドン夫人も来日しており、急遽多量の英書受贈に対応せざるを得なかった当時の状況を物語っている。

開館時の蔵書総数は119,806冊とあるが、このうち、実際に閲覧可能であったのは、準備が整った46,217冊(和漢書18,512冊、洋書27,705冊)であった。日英文庫の影響を受けて、閲覧可能なうちの6割を洋書が占めていた。

果たして、開館前の日比谷図書館の備付図書選択基準は果たしてどのようなものだったのだろうか。明治39年11月22日の時事新報には図書館評議委員会の委員、肥塚龍、中鉢美明、稲茂登三郎、林謙三、坪谷善四郎、横田清兵衛、和田、田中、市島三図書館長らが定めた項目があがっている。

- (1)市民の日常生活に必須なる参考図書
- (2)読書の趣味を涵養するに適する図書
- (3)実業に関する図書
- (4)一般学生の自修に資すべき図書
- (5)東京市に関する図書
- (6)官公学校及私団体の刊行書
- (7)内外市政に関する図書
- (8)家庭の読物として適当なる図書
- (9)学校技芸の研鑽に資すべき辞書及百科全書類
- (10)内外新聞雑誌を収集する事

この選書標準の項目をみると、辞書や内外の市政に関する資料や新聞雑誌など、調べものに用いる資料も含まれている。明治33年に伊東らが東京市立図書館設立原案として目指した、3,000から5,000冊の通俗図書を備える考え方とは相違が見られる。

所蔵コレクションの面で、明治40年10月の日英文庫の多量の洋書寄託が大きな影響を及ぼしていることがわかる。

#### IV 日比谷図書館の設計

日比谷図書館の本館は木造瓦葺2階建、階下はヌーボー式、階上はコリント式で、工学士三橋四郎(1867-1915)が設計した。三橋は明治後半期の新建築思想の先駆者として、耐火建築の研究でも業績を残している。帝国大学工科造家学科卒業後、陸軍省、通信省を経て、明治39年4月東京市に技師として任用された。この三橋技師の任用で建築面での本格化の段階に入る。図1は三橋任用後の明治39年7月5日の図書館平面図である。『万朝報』は、ハイカラ式に設計変更が行われたと報じている。



図1 東京市立図書館正面図(万朝報)

今回、日比谷図書館の建築材料、構造、デザインを物語る資料が残されていることがわかった。雑誌『建築世界』5号(明治40年11月)から、2巻9号(明治41年9月)に掲載された「日比谷図書館仕様書」と口絵や図として挿入された実例図である。

建築実例として、7種類の図面が掲載され、階下平面之図、玄関詳細図百分ノ一、日比谷図書館配景図、左側階段詳細図、階上平面之図、本館階段断面之図、書庫断面之図、詳細図書庫が掲載されている。図2は6号に掲載された、「玄関詳細図百分ノ

一」である。図右部分は図 1 の中央部分、左は正面小塔縮断面と横断面の図である。

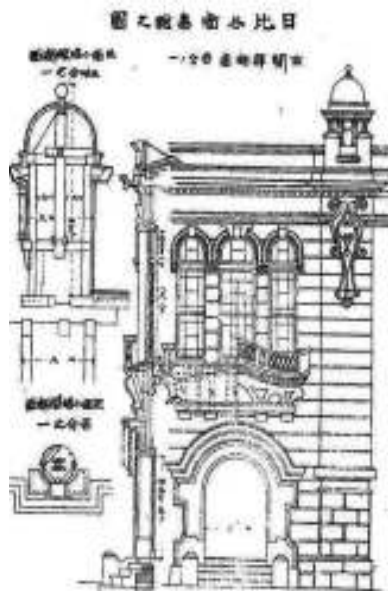


図 2 日比谷図書館玄関正面図

図 3 は 4 階建煉瓦造の書庫断面図で、建物背部にあたる。窓や入口に防火シャッターの耐火設備を伴い、10 万冊の収蔵が可能であった。大橋図書館庫も書庫を 3 階煉瓦造にし、防火に配慮しており、その影響を思わせる。

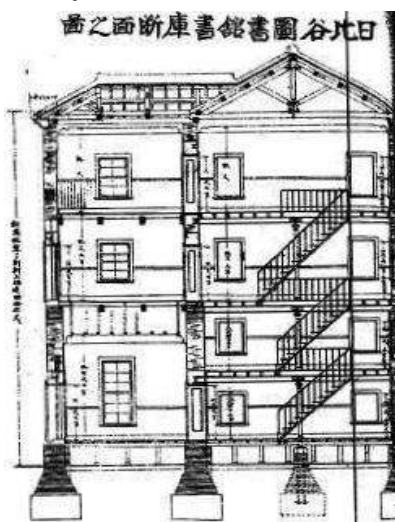


図 3 日比谷図書館書庫断面之図

「市立図書館設計変更」と題した記事が、明治 39 年 9 月 17 日の『日本』に掲載されている。東京市学務委員会は臨時会を開き市立図書館設計変更を協議し、元の設計が日比谷公園の風致を害する恐れがあるという理由から、便所、小使室、湯沸室等付属舎の位置を変更することを決定したとある。

そこで、明治 39 年 7 月 14 日の『国民新聞』の設計平面図と最終的な間取の状況を示している、『建築世界』掲載の平面図を比較してみた。確かに新聞『日本』が指摘している位置の 1 階小使室、物置、湯沸所部分に変更が加わっていることを確認した。

明治 39 年 11 月 20 日施行の文部大臣宛「市立図書館設立認可願書進達」に付された、縮尺 200 分の 1 の 1、2 階の図書館配置図と『建築世界』の平面図を比較してみると、『建築世界』の仕様書の同様の間取で提出されていることがわかり、進達以降は間取上の大きな変更は行なわれなかったことになる。

#### V 今後に向けて

日比谷図書館の建設は、設立建議後、戦争や天候などの障害で、大幅に遅れた。しかし、経費予算面では戸野周二郎、所蔵コレクションの形成や図書館運営では伊東平蔵、建築設計面では、三橋四郎などの実務家の任用を契機に、急速に促進され、明治 41 年 11 月の開館に結びつく。

昭和 20 年 5 月 26 日の戦火で日比谷図書館の建物や蔵書は焼失したが、今回は『建築世界』に掲載された仕様書の断面図や平面図から、その一端を伺い知ることができた。今後も、引き続き残された貴重な資料の調査や検証をつづけていきたい。